

気持ちを察する親切

神奈川県 洗足学園中学校 1年 鈴木 爽

私が通っていたアメリカの現地校は、韓国、中国、日本などアジアの友達が多い学校だった。アメリカに来たばかりの友達がひんぱんに転校してきた。私も5歳で入学したとき、まったく英語がわからない中、不安な気持ちで学校に通っていた。そんな私もグレード5になり、たくさんの友達と楽しい学校生活を送っていた。

グレード5のクラスに韓国人の女の子が転校してきた。転校生はまったく英語がわからなかった。クラスには韓国人の友達も多く、韓国語を交えながら英語の授業を説明できる友達も多かった。転校生は内気な性格で、英語で話しかけられるのを怖がっていたので、韓国語を話せない私は遠くで見守っていることが多かった。早く現地校が楽しくなってくれるといいなと思っていた。

そんなある日、算数の授業で、アメリカ人の担任の先生が転校生に説明しているときのことだった。担任の先生は、感情的になりやすく、背も高い女の先生で、クラスメートから怖がられる存在だった。まして英語のわからない転校生にとってはなおさら怖い存在だったはずだ。

先生が何を説明しているかわからないのにもかかわらず、転校生はうなずいてしまった。その様子を見た先生は、「なぜ英語がわかるのに、ほかのこともやらないのか」というようなことを言いだし、怒りだしてしまった。どうして先生が急に怒りだしたのかわからない転校生は、ただうろたえ、泣きだしてしまった。先生が感情的になった様子に、クラスは一瞬静まり返った。

英語がわからなのに学校に来るということが、どんなに大変なことなのか理解しようとしないう先生に対し、私の怒りは爆発した。転校生が必死で頑張っているのに、それに対してどうして温かく手を差しのべられないのかということ、私はまるで現地校に入学したときに戻ったかのように、転校生の気持ちを話し続けた。同じような苦勞をしてきたクラスメートたちも、私に続いて先生に抗議を始めた。先生も抗議をした私たちに怒りをぶつけ始め、クラス全員と先生が校長室で話をするという事態となった。

この日を境に、いつも緊張した顔で登校してきた転校生の顔が、やわらかい表情に変わったような気がした。気持ちを韓国語で伝えることができる韓国人の友達だけでなく、ほかのクラスメートにも笑顔を見せるようになった。「おはよう」と英語で声をかけ合うところから始まり、だんだんクラスに溶け込んでくるようになった。

言葉が通じ合わない中で親切にするというのは、とても難しい。手振りや身振りで説明するのも限界がある。そんな中でも相手の気持ちを察している、そして察していることを本人に伝えていく。そんな小さな親切が、人間関係を変えていくきっかけになるということを感じたできごとだった。